

第11回 環境気象学コロキウム

下記の通り、第11回環境気象学コロキウムを開催致します。今回の話題提供者は、環境システム学専攻の寺林大貴さんと中里洋平さんです。学部1年生から大学院生まで気象学・気象予報士に興味をお持ちの方は、ぜひご参加ください。

開催日:2014年10月15日(水) 18:00～ ※90分程度

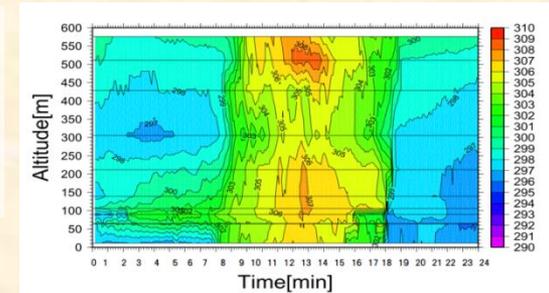
会場:アカデミックキューブ4階415室

話題提供者:

寺林 大貴 氏

「富山平野のフェーン発現時にみられる宮川-神通川谷筋内における地上大気場の特徴」

北陸地方はフェーン現象が比較的発生する地域であり、宮川-神通川の谷筋を抜ける風が卓越する観測事例がある事や、谷筋を抜けるギャップ流の存在がフェーンによる昇温を強めるという研究指摘もある。そこで、宮川-神通川谷筋に沿って地上観測を行い、フェーン発現時の谷筋内の大気場と富山平野の昇温との関係性について調査した。昨年の観測結果ではフェーン発現時に富山平野側谷出口に向かい温位の上昇がみられた。

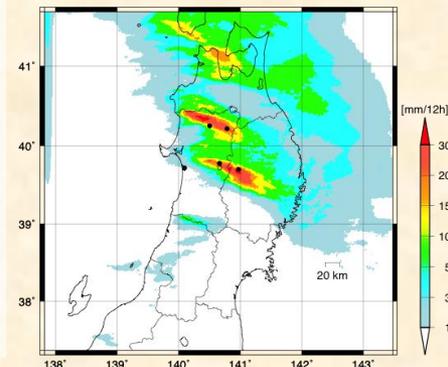


中里 洋平 氏

「2013年8月9日秋田・岩手豪雨で発生した大雨における局地前線の影響」

2013/0809/03-15JST

線状降水帯の発生・発達における地形、下層の高相当温位や鉛直シアなどの重要性が先行研究により明らかになっている。また、線状降水帯は局地前線に伴い発生する場合がある。しかし、局地前線に伴う線状降水帯の発達・維持についての過程は明らかになっていない。そこで、領域気象モデルWRFを用いて、2013年8月9日東北地方での大雨を対象とし、降水系の維持・発達の過程を調査した。再現計算から、975hPa高度の相当温位の水平勾配が大きい領域で風の水平シアが大きく、これらの領域は降水帯の発生位置と対応していた。従って、局地前線が発生したと考えられる。また、この領域では風の鉛直シアが大きく、局地前線による影響が降水系の維持・発達に働いたと考えられる。加えて、地形改変した感度実験の結果から降水量が減少したことから、地形による強制上昇も降水系の発達・維持に影響したことが示唆された。



掲示期間:2014年10月15日(水)まで 環境気象学分野 重田祥範